

~~~~~  
**研 究**  
 ~~~~~

## 不登校児を持つ親の自助グループ活動が 母親の意識と子どもに及ぼす影響

肥田 幸子<sup>1)</sup>, 大久保 義美<sup>2)</sup>

### 〔論文要旨〕

不登校児の母親の研究においては、自助（セルフヘルプ）グループ活動が母親に安定的変化をもたらすことが明らかにされている<sup>1)~5)</sup>。これら先行研究の成果をふまえ、本研究では、母親が自助グループ活動を行うことによって、母親の意識と行動がどのように変化するかを調査した。その結果、役割意識の変化や母子一体感からの分離などが見られること、また、わが子の生き方が既存の価値観に合致するものであるか否かにこだわらなくなっていくことが実証された。さらに、親子ペアの回答の中から、母親の変化と子どもに現れる変化の相互関連性が示唆された。

**Key words :** 自助グループ, 子どもの不登校, 母親の意識の変容, 子どもへの影響

### I. はじめに

不登校児数は123,000人以上（2005, 文部科学省）ともいわれている。社会的問題として取り上げられて久しいが、決定的な解決策はまだない。このような状況の中で、不登校児やその親たちは、困難な現状と予測のつかない将来に対し大きな不安を感じている。筆者たちは、不登校児の親の自助グループに長期間参加し、親たちの不安を聞きながら活動を共にしてきた。そのなかで、参加から数年経過した母親たちの多くが、精神的に強くなり、安定感を増していくことを実感した。自助グループには社会的学習過程が含まれるということが従来から指摘されている<sup>6)</sup>。松本は不登校児の親の自助グループにおいても、このような学習過程が含まれ、母親の認識の変容が生じると指摘している<sup>2)</sup>。本研究では、その変容の傾向を明らかにし、数量的に実証することを目的とする。子どもの状

況が必ずしも再登校に向かっているとは言い難いなかで、母親の何が変化したためにこのような変容が起こるのであろうか。これらを実証することは、これからの不登校支援の方向を探る一助になると考える。

不登校児の母親に関する研究については、事例研究は多く見られるが、質問紙調査を行った研究はそれほど多くはない<sup>7)</sup>。不安定な状況にある親や子どもに質問紙記入を依頼することは困難であり、共に活動するものであるからこそできた研究であるともいえる。母親の自助グループ活動が子どもへの対応の変化をもたらす、子どもの変化をももたらすという報告がある<sup>1)</sup>。しかし、この研究は親に対して子どもの変化を聞いているものである。本調査では、決して多いデータとはいえないが、親子双方の回答が得られたため、子どもの回答からの分析と、親と子の関連も調べるのが可能になった。

The Influence of Self-help-groups on the Self-awareness of Mothers of School Refusal Children and on the Children Themselves.

[1804]

Sachiko HIDA, Yoshimi OHKUBO

受付 06. 1.30

採用 06. 6.11

1) 東邦学園大学学生相談室（臨床心理士） 2) 愛知みずほ大学人間科学部人間科学科（研究職）

別刷請求先：肥田幸子 東邦学園大学学生相談室 〒465-8515 愛知県名古屋市長東区平和が丘3-11

Tel : 052-782-1241 Fax : 052-782-1943

## II. 対象と方法

### 1. 対象

調査対象は、不登校の子どももしくは不登校であった子どもを持ち、親の自助グループ（不登校親の会など）に参加している母親およびその子どもとした。

### 2. 方法

#### (1) 予備調査（項目の収集と作成）

##### (i) 聞き取り調査

2003年11月から12月にかけて、9名の母親を対象に個別面接式の聞き取り調査を行った。対象者への質問項目は、①子どもの不登校の状況、②過去に欲しかった、もしくは現在欲しいと思う情報や施設、③学校に対する意見、④子どもの不登校について思うこと、の4つであった。

##### (ii) 予備質問紙調査

聞き取り調査の結果を参考にして項目を作成し、2004年2月に質問紙（無記名式）を郵送で配布ならびに回収する方式で、質問紙調査を実施した。母親39名に郵送し26名から回答が得られた（回収率：66.7%、平均年齢47歳5か月、年齢範囲40～54歳）。質問紙の内容は、①子どもの不登校に関するもの、②自助グループ活動に関するもの、③母親の気持ちと行動の変化に関するもの、④母親の役割意識に関するもの等であった。これらの予備調査の結果に基づいて、本調査における項目を設定した。

#### (2) 本調査

2004年6月に質問紙（無記名式）を母親と子ども180組に手渡し、郵送で回収した。母親111名（回収率：61.7%、平均年齢：46歳2か月、年齢範囲：36～58歳）、子ども61名（回収率：33.9%、平均年齢：15歳1か月、年齢範囲：10～26歳）の回答が得られたので、これらを分析の対象とした。分析は、母親と子ども各々の意識と行動の変化については対応のある2群の差の検定を用いて比較し、さらに母親については因子分析を用いて検討した。母親と子どもの関係性については、スピアマンの順位相関係数を用いた。質問紙の内容は以下の通りであった。母親に対しては、①子どもの不登校に関するもの1問、②母親の気持ちと行動の変化に関する

もの1問（21の下位項目が含まれる）、③母親の役割意識に関するもの2問の計4問であった。子どもに対しては、④自分の気持ちと行動の変化に関するもの1問（16の下位項目が含まれる）であった。①では、現在の子どもの状況と親の気持ちを自由記述で求めた。②、④では、各質問項目に対して[5：よくあった、1：なかった]を両極とする5段階選択肢から、子どもの不登校開始直後と現在について各々選択を求めた。③では、3つの役割（母・妻・一人の女性）のうち最も重要と考えるものを、子どもの不登校前と現在について各々選択を求めた。

## III. 結果

### 1. 母親の変化

#### (i) 母親の気持ちと行動の変化

不登校が始まって1か月以内と現在（1年以上経過後）の気持ちと行動の変化を表1に示す。

17.を除いたすべての項目において、母親の気持ちは安定的な方向へと有意に変化していた。

#### (ii) 気持ちと行動の変化の因子分析

(i)の項目の回答の奥に潜む要因をまとめ、各要因ごとの変化の差をみるために因子分析を行った。因子分析は主因子法である。因子数は個有値1、因子負荷0.4以上の基準をもうけ、4因子と決定した。また、これら因子には相関があるとみなし、プロマックス回転を採用した。ただし、質問項目4は因子負荷がどの因子に対しても低いため、これを削除し再度因子分析を行った。その結果を表2に示す。

第1因子は「2.このまま学校に行けなかったらと不安」、「3.早く学校に復帰して欲しいと考える」等の質問に対して負荷が高い。「14.世間の目が気になる」を含むということは、不登校の長期化によるあきらめ感ではなく、学校という既存の人生の一つのルートにこだわらなくなったことを示しており、「子どもの将来に対する視野の広がり因子」と命名した。第2因子は「15.このことがきっとこの子の人生に役に立つことができる」、「9.子どもを一人の個人として認識できる」、「19.子どもの不登校によって自分が成長した」に対して因子負荷が高く、「子どもと母親の人生の分離因子」と命名した。

表1 母親の気持ちと行動の変化

質問項目	1か月以内	現在	t値 (p)
1. なぜうちの子が……とそればかりを考える	3.93	1.7	17.43 (**)
2. このまま学校に行けなかったらと不安	4.13	1.71	17.17 (**)
3. 早く学校に復帰して欲しいと考える	3.96	1.68	16.22 (**)
4. 子どもの不登校は自分の育て方に責任がある	3.5	2.13	10.00 (**)
5. こうなったからにはあわてても仕方がないと思う	2.65	3.71	5.40 (**)
6. 夫婦仲が良いと感じる	2.98	3.33	3.36 (**)
7. 子どもは最も優先すべき生きがいだ	3.41	2.77	4.78 (**)
8. 同じような経験をした人の話をもっとききたい	3.96	3.25	4.34 (**)
9. 子どもを一人の個人として認識できる	3.01	4.37	10.96 (**)
10. 人生は長いのであせらないで大丈夫	2.56	4.27	12.39 (**)
11. 子どもは自分の分身だと思う	2.44	1.75	6.40 (**)
12. 不登校に関して、夫(妻)と協力して対応している	2.82	3.3	4.35 (**)
13. 舅, 姑, 祖父母から言われることが辛い	2.95	2	7.73 (**)
14. 世間の目が気になる	3.47	1.88	12.18 (**)
15. このことがきっとこの子の人生の役に立つと思う	2.44	3.98	10.56 (**)
16. 子どもの不登校が家族のつながりを深くした	2.31	3.31	7.38 (**)
17. 夫(あるいは妻)と子どもの話をする	3.5	3.66	1.35 (n.s.)
18. 子どもの不登校が自分の友達を作ってくれた	2.44	3.51	7.84 (**)
19. 子どもの不登校によって自分自身が成長した	2.7	4.28	11.34 (**)
20. 学校に行っている子どもと比較してしまう	3.8	2.12	13.02 (**)
21. 自分自身の人生も大切にしたい	2.73	4.26	11.04 (**)

対応のある2群の差の検定 \*\* :  $p < .01$  n.s. = 有意差なし

第3因子は「6.夫婦仲が良いと感じる」、「12.不登校に関して、夫(妻)と協力して対応している」等の質問であることから、「夫婦での協力因子」と命名した。第4因子は「子どもは最も優先すべき生きがいだ」、「舅, 姑, 祖父母から言われることが辛い」等の質問であることから、「古い価値観からの離脱因子」と命名した。

#### (iii) 因子間の平均値の差の比較

因子間で1か月以内と現在の得点差の平均値は、子どもの将来に対する視野の広がり: 2.04, 子どもと母親の人生の分離: 1.41, 夫婦での協力: 0.61, 古い価値観からの離脱: 0.76であった。

#### (iv) 役割意識の変化

母親たちに「あなたにとってどの役割が大事

ですか」と質問した。子どもの不登校直後と現在(1年以上経過者のみ)それぞれの結果を図1に示す。この質問はSmithら<sup>9)</sup>の調査を参考に設定したものである。

不登校が始まった直後においては母親の役割を大事だと考えている人の割合が高かった。しかし、自助グループ活動に1年以上参加した経験によって、彼女たちは一人の女性としての意識へ明らかに変化していた。

#### (v) 母親の役割変化のきっかけ

役割変化のきっかけは、(i 母親の気持ちと行動の変化)の質問項目を選択肢として用いた「21.自分自身の人生も大切にしたい」(72%), 「9.子どもを一人の個人として認識できる」(65%), 「19.子どもの不登校によって自分自身

表2 母親の気持ちと行動の変化の因子分析

質問項目		F 1	F 2	F 3	F 4
子どもの将来に対する視野の広がり	2	0.769	-0.030	0.055	0.050
	3	0.762	0.107	-0.077	-0.005
	20	0.756	-0.070	-0.015	0.061
	1	0.674	0.020	0.102	-0.030
	14	0.516	0.138	-0.037	0.257
	8	0.294	0.132	-0.022	0.000
子どもと母親の人生の分離	15	0.258	0.665	0.064	-0.202
	9	-0.151	0.648	-0.132	0.337
	19	0.095	0.569	0.255	0.066
	5	0.123	0.532	-0.181	-0.038
	18	-0.258	0.508	0.505	-0.034
	10	0.370	0.477	-0.034	0.107
	21	0.332	0.428	0.117	0.011
夫婦での協力因子	6	0.114	-0.092	0.700	-0.119
	12	-0.003	-0.116	0.636	0.265
	17	-0.046	-0.063	0.588	0.028
	16	0.233	0.113	0.513	0.034
古い価値観からの離脱	7	0.030	-0.007	-0.018	0.718
	11	0.075	0.182	-0.009	0.592
	13	0.118	-0.100	0.130	0.575

が成長した」(56%)などが高かった。

2. 子どもの変化

子どもに対し、不登校が始まって1か月以内と、現在の気持ちと行動の変化を質問したところ表3の結果が得られた。

⑮「進路について悩む」は有意な変化がなかった。①②⑭など、大きく変化を見せているのは

行動面の変化であった。

3. 母親の安定と子どもの安定

自助グループ活動によってもたらされた母親の心理的安定は、その子どもにも何らかの関連があるのかを調べた。母子がペアで回答しているもののうち、学校に復帰、進学、就職したものを除いた29組を対象とした。これは、子どもの状況の好転からの反映を避けるためである。気持ちと行動の変化の差の相関を調べたところ、散布図において正の相関を示し、相関係数は $\rho=0.29$ であった。データサイズが小さいということもあり、有意差はないが、緩やかな相関があると考えられる。

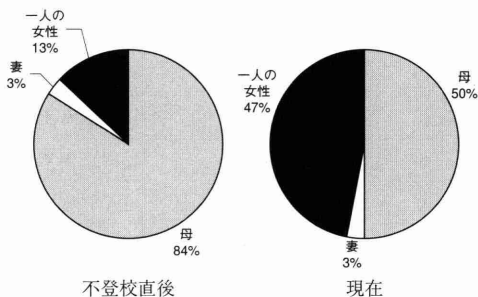


図1 あなたにとってどの役割が大事ですか

IV. 考 察

1. 母親の変化

(i) 気持ちと行動の変化

子どもの不登校が始まった時、ほとんどの母

親たちはショックと不安に襲われる<sup>4)</sup>。稲垣は子どもの不登校に遭遇した親の心境には共通点があると、「子どもの将来への不安」、「自らの罪悪感」等をあげている<sup>8)</sup>。これらの母親の気持ちが自助グループの参加を経て何らかの変化をしている報告がある。例えば、松本は、今までとは違った人間関係の中で、他者に支えられている感じがするようになったと述べている<sup>1)</sup>。

本調査における母親の気持ちと行動についての回答は、ほとんどの項目において安定的な変化を示していた。有意に変化しなかった「17. 夫（あるいは妻）と子どもの話をする」は不登校直後にも高い数値を示しており、そのまま維持されていると見るべきであろう。松本<sup>1)</sup>は親の会への参加によって配偶者を理解しようとする姿勢を促進させると述べている一方、新しい価値体系に脱皮しようとしている母親と既存の価値体系に留まろうとする父親の間には激しい相克が起こるとも述べている<sup>3)</sup>。記述回答では

「主人のほうが子どもの不登校を許せないという思いが強かった。休んで何をやっている子どもに怒鳴り……後略」というものもあった。不登校の子どもについて夫婦で語ることは根本的な家族のあり方を問い直すことになる難しい問題なのかもしれない。

因子分析結果からは、母親たちは既存の学歴などの価値観にとらわれず、自分自身の人生を大事と考え、夫との協力体制をとりながら、旧来の妻や母としてのあり方、ジェンダー観から脱することで自らの安定を得ていることが分かる。なかでも子どもの将来に対して視野が広がっていることが、大きな変化といえる。

#### (ii) 役割意識の変化

彼女たちは母親役割が最優先である視点からも解放されようとしている。子どもが不登校にならなかったら、一般的には、子どもが学校を卒業し、自立を果たす頃までこのような急激な役割意識の変化は現れないであろう。これらの変化は、子どもが不登校になっても孤立するこ

表3 子どもの気持ちと行動の変化

質問項目	1か月以内	現在	t値 (p)
①家から外出する	2.41	4.00	6.94(**)
②友達とつきあう	2.36	3.43	4.77(**)
③他人の目が気になる	3.48	2.57	3.83(**)
④時間をもて余す	3.76	2.94	3.51(**)
⑤いらいらしたり、むしゃくしゃする	3.31	2.87	1.86( *)
⑥口論やけんかをする	2.93	2.45	2.37( *)
⑦繰り返し、くやんだり、自分を情けなく思う	3.04	2.30	4.04(**)
⑧やる気がおきなかったり、根気が続かない	3.72	2.83	4.51(**)
⑨ぼんやりして集中できない	2.95	2.30	3.48(**)
⑩あせりや不安を感じる	3.21	2.59	3.03(**)
⑪生活時間が乱れる	3.49	2.64	3.98(**)
⑫父親とよく話をする	1.98	2.61	3.75(**)
⑬趣味などを楽しむ	3.46	4.04	2.91(**)
⑭母親とよく話をする	3.07	3.73	4.08(**)
⑮進路について悩む	2.80	2.81	0.07(n.s.)
⑯よく眠れる	2.89	3.33	2.49( *)

対応のある2群の差の検定 \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$  n.s. = 有意差なし

となく、情報や仲間を求めて活動を続けた母親たちの変化の実態であることは確かである。先行研究でもセルフヘルプグループにおける母親の肯定的変化を報告している<sup>1)~5)</sup>。この役割意識の変化は、子どもの不登校受容過程の中で、母親の価値観が再構築されていったことを示唆している。

## 2. 子どもの変化

子どもたちはだんだんと外出したり、趣味や、友達との遊びに時間を使えるようになり、身体的にもやる気がでたり、集中ができるようになってくる。それらと比べて、気持ちの面では変化の少ないものが目立ち、イライラしたりむしゃくしゃする気持ちは変化しにくい。進路については、本人の気持ちや行動のみならず、社会の構造そのものとも関わってくる問題であり、外部からの本格的な支援が必要であろう。父親との関係では、有意な変化はあるが、母親との関係に比べて低い値で推移していた。「父親は私のいうことを無視する」、「父は話を聞いていない」という記述回答があり、父親は母親よりも話しにくく、距離感を感じているということであろう。

## 3. 母親の安定と子どもの安定

相関は因果関係を示すものではないが、母親の考え方や態度が不登校の子どもに敏感に影響するというのは当然であり、また、それが母親にも還元されていくという相互作用もあると考えられる。母親の記述回答からも「とても落ち着いて日々生活しています。私自身が落ち着くと、子どもも落ち着くということを実感しています」、「学校に現在登校していないが、家で元気に暮らしています。子どもに私が『学校に行かなくていい』と言ってから徐々に明るくなりました」という記述が見られた。1年以上自助グループ活動を経験した母親は、気持ちや行動の面で安定的に変化していく。それら母親の安定感が増すほどに子どもも安定していくと考えられる。

## V. おわりに

母親たちは親の会における学習と相互作用過

程において、子ども、夫、社会への認識を読み替える<sup>2)</sup>。そして、価値観を変えるということは自分にとって真に大切なものを問い直し、一段上の次元から現実を受け止めることである<sup>10)</sup>。しかし、筆者たちが活動を共有する中で、母親たちの変化はこれらの内面的なものだけに留まらない感覚があった。最も優先されていた母親役割に対する見直しや、自責感・孤立感からの開放というような内的な変容に加えて、社会的資源を利用できる社会的能力の広がり、組織的な活動から生まれる連帯感なども同時に感じられる。つまり、母親から一人の人間へという意識の変容、気持ちの安定的変化、社会的な視野の広がりなど、社会性の発展や実行力の獲得を含めた人間的な成長と呼ばれるようなものがそこに起こり、それが子どもにも何らかの影響を与えると考えられる。今回、それを実証できたことで、自助グループを運営する母親たちの励みになること、加えて、そのような民間の活動に対して、公的な援助が広がることを期待している。母親たちはここで得たエネルギーを自らの人生の中で、有効な資源としてどのように活用していくのだろうか。筆者らは今後も母親たちと共に実践し、報告することをこれからの課題としたい。

## 謝 辞

この調査に協力していただいた、愛知県内の自助グループの関係者の皆様方に深く感謝します。

## 文 献

- 1) 松本訓枝. 「不登校」児家族の変容とセルフヘルプ・グループの役割 (第1報) — 「親の会」参加後の子どもと親の実態 —. 生活指導研究 2001; 18: 138-157.
- 2) 松本訓枝. 母親が語る「不登校」問題と対処 — 「親の会」における学習と相互作用過程 —. 市大社会学 (大阪市立大学社会学研究会) 2003; 4: 63-80.
- 3) 松本訓枝. 母親たちの家族再構築の試み — 「不登校」児親の会を手がかりにして —. 家族社会学研究 2004; 16(1): 32-40.
- 4) 小野 修. 不登校児の親の変化過程仮説; パーソンセンタード・アプローチ. 心理臨床学研究

- 1993; 10(3): 17-27.
- 5) 山田哲也. 不登校の親の会が有するく教育 (ベダゴジー) の特質と機能—不登校言説の生成過程に関する一考察—. 教育社会学研究 2002; 71: 25-45.
- 6) Katz, A.H. Self-Help in America: A Social Movement Perspective. Twayne Publishers. 1993  
久保絃章監訳 セルフヘルプ・グループ. 岩崎学術出版 1997.
- 7) 板橋登子, 佐野秀樹. 不登校児の母親についての研究の現状と課題. カウンセリング研究 2004; 37(1): 74-84.
- 8) 稲垣 卓. 登校拒否児への援助. 金剛出版 1991
- 9) Smith, K.C., Schooler C. Women as Mothers in Japan: The Effects of Social Structure and Culture on Values and Behavior. Journal of Marriage and The Family. 1978; 40: 613-620.
- 10) 小此木啓吾. 対象喪失. 中央公論社 1979.

---

書 評

---

学校医・学校保健ハンドブック  
— 必要な知識と視点のすべて —

編 集 衛藤 隆, 中原 俊隆

発 行 文光堂

A 5 判 556頁 7,980円 (本体7,600円+税)

少子化が急速に進行中の時代だからこそ、子どもの健康の大切さが十分に認識されなければならない。それは、学校現場においてもいえることである。今日は、子どもの生活習慣が、子どもの健康にとって必ずしも望ましい影響因子になっているとは限らない。その意味からも、新しい時代の条件に即応した学校保健のあり方が検討されなければならない。

健康診断は、学校保健活動の中で、中心的機能を果たしているといっても過言ではない。当然、健康診断についても、時代の条件を適切に反映したものでなければならない。特に、近年は、子どもの心の健康障害をもたらす事象は余りにも多く、それも複雑化の様相を呈している。現場では、学校医がそれに対応しなければならない。

この度、刊行された「学校医・学校保健ハンドブック」は、学校保健の当事者にとって、非常に有益なものと思われる。このような書の企画と編集にあった衛藤東大教授と中原京大教授に多大な敬意を表したい。本書の内容は、学校保健の基本的知識 (第 I 章)、健康診断の実際に役立つ知識 (第 II 章)、個別の対応を必要とする疾病異常の解説 (第 III 章)、応急処置と事故対策 (第 IV 章) からなっている。この本を通して読んで全般的な知識を習得してもよく、いろいろな問題に遭遇したときに、その都度、必要な知識を得ることもできる。また、学校医はもちろんのこと、学校歯科医や学校薬剤師の方々にも役立つ、養護教諭、保健師など、学校保健で最も必要とされる (また、最も弱点でもある) 連携の相手の職種にも、傍らに置いていただきたいものである。

(日本子ども家庭総合研究所母子保健研究部長 高野 陽)